

【Editorial (論説)】

抗菌薬の持続点滴について

昨今、国内外を問わず、 β -ラクタム系抗菌薬の持続点滴による有効性に関する報告が散見されるようになって来ている。一般に、 β -ラクタム系抗菌薬の薬効と最も関連する PK-PD パラメータは Time above MIC¹⁾であるため、理論上、持続点滴により維持される濃度が原因菌の MIC を上回っているのであれば、優れた治療効果が得られると予測される。しかしながら、海外において実施された持続点滴と非持続点滴の比較臨床試験では、2つの投与方法間で臨床効果に有意差が認められた報告もあれば有意差が認められなかった報告もあり、一定の見解が得られておらず、持続点滴の有用性についてはさらなる検討が必要であるとされている²⁾。

また、 β -ラクタム系抗菌薬については、フルオロキノロン系抗菌薬等に比し、耐性菌選択に関連する PK-PD パラメータに関する検討が十分なされていないものの、不十分な曝露が耐性菌を選択する可能性が危惧されている³⁾。

抗菌薬の歴史は耐性菌との戦いの歴史と言っても過言ではない。画期的な抗菌薬の開発が低迷している今日、われわれは現在入手可能な抗菌薬を武器に感染症と闘っていかねばならない。抗菌薬に対する耐性化は、抗がん薬等の場合と異なり、一患者にとどまることなく com-

munity(地域)全体の問題となりかねない。われわれは、既存抗菌薬を用いて、有効性の確保、副作用発現の防止、さらに、耐性菌発現の抑制を念頭においた抗菌療法を行うことが重要である。

このような状況をふまえつつ、 β -ラクタム系抗菌薬の持続点滴については、どのような患者、どの種類の抗菌薬、どのような用法・用量であれば、耐性菌選択や副作用発現といったリスクを上回るベネフィットが得られるのかについて、慎重に検討していく必要があるだろう。

文 献

- 1) Hyatt J M, McKinnon P S, Zimmer G S, Schentag J J: The importance of pharmacokinetic/pharmacodynamic surrogate markers to outcome. Focus on antibacterial agents. Clin Pharmacokinet 1995; 28: 143-60
- 2) Craig W A, Ebert S C: Continuous infusion of beta-lactam antibiotics. Antimicrob Agents Chemother 1992; 36: 2577-83
- 3) Craig W A: Basic pharmacodynamics of antibacterials with clinical applications to the use of beta-lactams, glycopeptides, and linezolid. Infect Dis Clin North Am 2003; 17: 479-501

日本化学療法学会雑誌編集委員会